
裂く策士、咲く錯視

公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裂く策士、咲く錯視

【Nコード】

N6077L

【作者名】

公彦

【あらすじ】

従兄の木村准教授に連れられて佐加田教授のパーティーに参加した矢式奈美香と、無理矢理連れてこられた猪狩康平は、密室の中で死体が消失するという事件を目撃する。

登場人物

○大の人々
いかりこうへい

猪狩康平
やしきなみか

矢式奈美香
きむらよしとも

木村良知

○大三年

○大三年

○大准教授

佐加田家の人々
さかたまさひろ

佐加田昌弘
さがたしずえ

佐加田静江
さがたゆい

佐加田結衣
かしわだともひろ

柏田智宏
まきたようこ

牧田洋子

○大教授

昌弘の妻

昌弘の娘

佐加田家の使用人

佐加田家の家政婦

招かれた人々
あくつあきら

阿久津彰
せとぎょうこ

瀬戸京子

昌弘の友人

昌弘の友人

その他の人々
いせこうたろう

伊勢浩太郎

刑事

プロローグ（前書き）

何と言うか……。あまり自信ないですね。全部の作品そうですけど。それでも暇つぶしに貢献できたと思います。

それより、作を重ねるたび奈美香が図々しくなっていくます（泣）
彼女の暴走が止まらない……。

プロローグ

二度ある事は三度ある、とは誰が言った言葉だろうか。なかなか、どうして、正しい言葉である。

一度目は夏、二度目は秋と立て続けに殺人事件に巻き込まれた、猪狩康平、矢式奈美香、藤井基樹、新川怜奈の四人。

もう殺人事件に巻き込まれる事はないだろう。

そう思ったのは最初の事件の後であった。が、そこに二度目の事件。今度こそ、と思ったはずである。

しかし、その期待はまたしても裏切られる。

ただ、幸か不幸か、今回は藤井基樹と新川怜奈は事件に関わる事はない。つまり、今回は藤井の一言で始まったわけではない。

事件が解決した暁には彼らはこう言うはずである。

「ねえ、どんなだった？」新川怜奈はおとなしめの性格とは裏腹の好奇心を持ってこう尋ねるだろう。

「なんだよ、また仲間はずれ？」前回、前々回と事の発端でありながら解決の場にいなかった事を根に持つ藤井基樹はこう不満を漏らすだろう。

「簡単な事だったのよ」頭脳明晰で自信家の矢式奈美香は自慢げに話を聞かせるだろう。

そして、事件を解決した張本人、猪狩康平は何も言わない。その代わりにこう思うだろう。

呪われているのは藤井ではなく、自分なのではないか、と。

一章 gloomyな招待

1、

矢式奈美香はO大の1号館の一室にいた。1号館は教員達の研究棟になっており、学生は滅多に行く事はない。その1号館になぜ彼女がいるのかというと、もちろん教員に呼ばれたからである。

彼女が今いるのは360号室、木村良知准教授の研究室である。「ねえ、ちよつと汚すぎるんじゃない？」奈美香が眉間にしわを寄せる。

部屋の中は、カップ麺や弁当の容器、コーヒーの空き缶などが散乱しており、本棚があるにも関わらず、本は床に山積みになされていた。まさに人工物のジャングルである。

椅子の上にも物が置いてあるので、木村は即席で奈美香の居場所を確保する。

「いやあ、なかなか片付ける暇がなくてさ」木村は寝癖頭を掻きながら言う。まさかこの頭で講義に行くつもりだろうか。

「片付ける以前に、普通はここまで散らからないわよ」呆れたように奈美香は言い返す。

明らかに教員に対する言葉ではない。というのも彼らは従兄妹同士である。歳は十ほど木村の方が上だが、彼が面倒見の良い従兄だったかというと、現状を見てわかるとおりである。

「でもさあ……まあいいや。今度、片付けアルゴリズムでも作ろうかな」

「そんなもの作ったって結局片付けるのは自分でしょ？ ロボットがやってくれるなら別だけど」嫌みたらしく言ってみる。「効率的な手順がわかったってきつと片付けないわよ」

「う……」木村は言葉に詰まる。「てかさあ、奈美香、何しに来たの？」

奈美香はため息をつく。「何って、良兄よしにいが呼んだんでしょ！」

「え？」木村は目を丸くする。「そうだっけ？……ああ！思い出した」

「忘れるような事なら帰るわよ」すぐさま奈美香は踵を返す。

「ちよつと待った！ 部屋の話になって忘れてただけでかなり重要な事だ！」木村は右腕を前に突き出してストップのポーズをとった。

「何？」奈美香は思いつきり嫌そうな顔をしてみた。そもそも、あの程度の会話で忘れる事が本当に重要なのだろうか。

「そんな嫌そうな顔するなよ。今週の土日、暇？」

「土日？ まあ、暇だけど」

「佐加田教授のパーティーがあるんだけど、来ない？」

「佐加田教授？ 誰それ？」奈美香は首を傾げる。

「ああ、知らないか。奈美香にとっては他学科の先生だからな。ただの大学教授のくせにやたら金持ちでね。なんかすごい家系らしいんだ。で、毎年パーティーを開いているわけ。今年なんか新しく別荘建てたりしてさ。で、それに呼ばれたって事」

「なるほど」奈美香は頷く。

「来てくれる？」

「嫌よ」奈美香はきっぱりと言う。

「えー」木村は小学生のような声を出す。

「だって、誰かを連れて行きたいって事は一人じゃ行きたくないって事でしょ？ で、私に頼るって事はどうせ、ゼミ生には断られたんでしょ？ ってことはその佐加田って教授はろくな人じゃない」「う……鋭いね。けど、ろくな人じゃないってのは言いすぎだよ。ちよつと変わってるっていうか、まあ、去年は今の四年生を連れて行って……評判は良くなかったね」木村は苦笑いする。「それが三年生にも伝わって、全滅って訳。けど面白い人だよ、教授は。確かに一人で行くのはちよつと……。ああ、駄目だ。弁護できない。とにかく来てくれよ。一人じゃ、きついんだって」すぐるような目で奈美香を見つめる。

「去年はどんなだったの？」

「デザートがロシアンルーレットになってたんだよ。普通、これって罰ゲームに使うよね……。どっかがワサビ入りです、みたいなさ。で、緊張感を楽しむっていうか。けど何も言わないから、無警戒で食べたうちのゼミ生が……」木村の表情が痛々しい。いわゆる苦虫を噛み潰したような顔である。けど、ところで苦虫って何だろう。食べたら苦い虫？ 普通虫なんて食べないし……。誰か食べた事があるのだろうか。おっと、思考が逸れた。

「断ればいいじゃない。なんで、行かなきゃいけないのよ？」

「他の人は断ったりしているんだけど、俺は学生るときから佐加田ゼミで、大学に残ってからもういろいろとお世話になっっているから……」

「義理深いのね。いつてらっしゃい」奈美香はなんとなく微笑んでみる。ついでに手も振ってみる。

「そんなあ、頼むよ。一人で来いとは言わないからさあ。今度、飯おごってやるよ」

奈美香は呆れてため息をついた。それほど行きたくないのならば行かなければいいのに、と思う。

「回らないお寿司ね」特別、寿司が好きなわけではなかったが、高そうなものをイメージして言ってみた。

「……いいよ」

「そう、じゃあそういうことで。誰を誘おうかしら」

「頼むよ。あ、俺はこれから講義だから」そう言っ、散らかった机からノートパソコンを取り出した、いや、掘り出すという表現の方が正しい。「じゃあ」

木村は出て行った。そして奈美香は呟いた。

「結局、寝癖のまま行っ たわね」

2、

〇大の正門から講義棟までの通路の脇には桜が数本咲いている。緑色の木々の中で鮮やか過ぎるピンクがその存在を主張している。

桜とは不思議なもので隣のS市は一週間前に満開を迎えたがO市では今が見ごろである。「桜前線北上」なんて言葉があるが、S市とO市は緯度的には変わらないはず。この一週間の時差は何なのだろう。

木村の研究室を出た奈美香はその桜の下を通りながら誰を誘おうか考えていた。いつもの四人で行ってもいいが、単なる痛み分けのようで嫌だった。なぜ引き受けてしまったのだろう。しかし、後悔先に立たず、である。

怜奈は、可哀想かもしれない。前評判が良くないのに、連れて行くのは気が引ける。

そういう意味で藤井は適任かもしれない、と言ったら人権侵害だろうか。だがむしろ彼と二人でいる方がしんどい。これも人権侵害だろうか。別に二人じゃなくても良いが三人なら四人でも一緒ではないか。

やはり、猪狩が無難だろうか。と考えてどのあたりが「やはり」なのだろうという疑問。しかし、どうでもよいので中止。とにかく誘う事さえできれば、あとは文句を言わないだろう。問題はどうかって誘うかだ。とりあえず、猪狩に電話をかけてみる。結局、直球勝負である。

「何？」数回の呼び出し音の後、猪狩が電話に出た。不機嫌そうに聞こえるがこれが電話での彼の平常である。面と向かって話しても微々たる差しか感じられないが。

何でも相手の顔が見えない状態での会話が嫌らしい。

「あんた、今週の土曜って暇？」

「いや」

「何かあるの？」

「いや」

「……………」無性に電話を切りたい。しかし頼み事をしているのはこちらなので我慢する。

「嘘だよ。けど面倒事をご免だ」見事に見抜かれている。

「そんなことないわよ！ 良兄に佐加田教授のパーティーに誘われたから一緒に行かない？」

「ああ、佐加田教授ね……誰？」

「説明は面倒だから。で、来るの？ 来ないの？ てか来なさい！」
自分で言っておいて何だが、人に物を頼む態度ではないと思う。

「いいよ」

「え？」予想外にあっさりした返事に思わず聞き返してしまう。

「あ、行かない方がいい？」

「いや、そんなことない！ じゃあ、詳しい事はまた教えるから。じゃ」そう言っただけで電話を切る。

さて、意外と簡単に事が進んだ。あとはどうやって当日を乗り切るかだ。デザートは猪狩に食べさせようか。

二章 c r a z yな晚餐

1、
「ねえ」しばらく黙っていた奈美香が口を開く。「本当にあつて
の？」

木村、猪狩、奈美香の三人は車で山道を走っていた。車は木村が
運転している。中古で買った日産のブルーバード。かなり古い型で
今時オーディオがカセットテープという骨董品である。昔から運転
しているのならそういう事も普通なのだろうが、この車を買ったの
はつい数年前なので、もっと良い車を買えばよかったのに、と奈美
香は思っている。

「あつてるよ。もうすぐだから」

木村はさすがに正装で髪もしっかり整えている。こうしてみると
意外と男前だと思うが、普段の寝癖頭と散らかりっぱなしの部屋を
見れば、三十にもなって彼女がいないのも（もちろん過去にはいた
のだろうが）頷ける。

「もう、何回も聞いたんだけど。ああ、暇だわ」助手席に座る奈美
香は狭い車内で精一杯の伸びをする。

「じゃあ、暇つぶしにクイズでもやろうか」

「いいわよ。なんでもかかって来なさい！」

「じゃあ、行くよ。」

ある小学校で、調査をしたところ生徒達にある共通点が見つ
つたんだ。

算数が好きな子どもは国語が嫌い。

理科が嫌いな子どもは国語が好き。

理科が好きな子どもは社会が嫌い。

じゃあ、正しいのは次のうちどれ？

1、理科が好きな子どもは国語が好き。

2、社会が嫌いな子どもは算数が好き。

3、国語が好きな子どもは理科が嫌い。

4、算数が好きな子どもは社会が嫌い。

さて、どれだ？」

「いっぺんに言われてもわからないわよ。えっと、算。↓国×……」
奈美香は携帯電話を取り出しメモしていく。

「3じゃないの？」奈美香は首を傾げながら言った。

「はずれ」木村は意地悪く微笑んだ。なんだかその表情が憎たらしい。

「えー？ なんで？」

「高校で数学やった？」

「それ、馬鹿にしてる？」奈美香は頬を膨らませる。

「あんた、わかる？」奈美香は後ろに振り向き、猪狩に聞いた。

「……4」猪狩はそれだけ答えた。いつもに増して不機嫌な様である。

「お、正解。さすがだね」

「なんで？」奈美香は猪狩に尋ねるが猪狩は何も答えない。奈美香は舌打ちして、運転している木村の方を向く。

「えっとね、高校で命題ってやったろ？ で、もとの命題と対偶をたどっていけばいいのさ。命題が真でも逆と裏は真とは限らない。

けど対偶は必ず真だからね」

「あ、そうか」

「そんなに難しくない……」猪狩が呟いた。奈美香は思いつきり猪狩を睨みつける。猪狩は奈美香を無視して依然不機嫌な表情である。

「着いたよ」

奈美香が前を向きなおす。今まで車の両側は森だったが、視界が開けてきた。立派な洋館が見えてくる。

車を館の前の駐車場に停める。三人は降りたが、猪狩がまっすぐ森の方へと向かう。

「あれ、どこ行くの？」木村が訝しげに聞いた。

奈美香はすぐにわかった。なるほど、不機嫌そうに見えたのはこのためか。そして、できる限り呻き声を聞かないように努めた。

2、

その洋館は変わっていた。館自体はおかしくない、三階建ての立派な建物だ。三階建てというのも少し変わってはいるが。しかし、それよりも変わっているのは右側に別館が付いているの事だ。別館といっても塔のようで、本館より少し高く、こちら側には窓がない。そのためこちらから見ると大きな四角い筒のように見えて、それがこの建物の異質さを醸し出していた。この大きさなら一つの階に一部屋しかないだろう。

「あの建物、何？」奈美香は木村に尋ねた。

「さあ？ 教授って変わってるから。考えるだけ無駄だよ。さて、行こうか」

奈美香は変わっているとはいえ、立派な建物を前に気分が高揚しているようだ。三段ある段差を一気に飛び越えてしまった。

「危ないよ、もう」木村は苦笑いして、ベルを鳴らす。

しばらくして男の声がした。あまり若そうな声ではない。

「どちら様でしょうか？」

「あ、〇大の木村です。どうも」

「はい、少々お待ち下さい」

また、しばらくの間があつて扉が開いた。迎えたのは初老の男性だった。細身で白髪交じりだが端正な顔立ちが印象深い。

「お久しぶりです。柏田さん。」木村が深々と礼をした。

「一年ぶりですね、木村様。寒いでしょう、中へどうぞ」

柏田に促されて三人は中へ入った。

奈美香の印象としては、意外と質素、だった。吹き抜けで高い天井のホールに豪華なシャンデリアと絨毯の敷かれた大きな階段を想像していた。

しかし、吹き抜けでシャンデリアだが、通常の家の一階と同じく

らしいの高さに天井がある。という事はこのさらに上に三階がある事になる。階段のさらに奥に階段が見える。奥行きからして折り返し階段だろう。

質素とはいっても、金持ちの別荘を意識すればの事で照明や絨毯などは十二分に高そうに見える。さすがに銅像や絵画はなかったが左右に扉が一つずつあった。

「意外と質素なのね」奈美香は口に出した。「部屋も少なそうだし」「右が食堂、左が応接間でございます。奥には厨房や物置などもございますがここから直接いけるのは二ヶ所ですね。そのかわり広いですよ。二階が昌弘様とご家族の部屋で、三階が客室となっております。三階建てなので一階は部屋が少なく広くできるんです。上の階にいくらでも部屋がありますから」柏田が説明した。「ゼミ生ですか？」

「いえ、ゼミ生には丁重に断られまして……。従妹なんですよ、矢式です。あと友人の猪狩君」木村が苦笑いして答えた。

「矢式奈美香です。よろしくお願いします」奈美香は頭を下げた。

「猪狩康平です」猪狩も浅く頭を下げた。

「柏田と申します。佐加田家の使用人をやらせていただいております」柏田が深々と礼をする。三人の中で一番深い。

「では、お部屋にご案内します」そう言うと柏田は踵を返して歩き出す。三人も後に従った。

「ねえ、大学の教授ってこんなに金持ちなの？」奈美香が木村に囁いた。

「まさか、そうだったら僕ももっと真面目に研究してるよ。佐加田家はよくわかんないけどすごい家系らしいから、その遺産だろうね。柏田さんも教授のお父さんに仕えてたらしいし」

仕えていた、という単語が少し時代錯誤に思えた。この時代にそのような職業があることに奈美香は驚いた。

二階に上がると左手に広い空間が見えた。ちょうど応接間の上にあたる部分である。ソファなどがある事から談話スペースのような

所だろう。反対側、つまり食堂の上は通路があり、奥にいくつか扉が見えたが立ち止まることなく三階へと上がったのでよくわからなかった。三階は吹き抜けがない分、広いスペースがあり、同じように談話スペースがあった。

部屋がいくつもあり、廊下の先には、暗くてよく見えないが、別館があるようだった。目と鼻の先である。三人の部屋は階段の隣から猪狩、奈美香、木村の順だった。

「では、夕食パーティーは七時からですので」

奈美香は時計を見た。現在六時三十五分。それほど時間はない。教授つて、どこにいます？」木村が尋ねた。

「お部屋におられると思います。ご案内いたします」

「じゃあ、君たちは七時になったら食堂に行つてね」木村はそう言つて柏田と共に二階へ降りていった。

「あー、いいなあ。私もこんな所に住んでみたい！」

「別荘だから、住んではいけない」猪狩が久々に口を開いた。

「……人の揚げ足取らないでよ」奈美香は猪狩を睨んだ。

「おやおや、ずいぶん若いお客さんだなあ」

木村の部屋の向かいから男が出てきた。やや大柄で少し白髪が混じっている。頬に大きなホクロがあった。

「私たち木村先生について来たんです。矢式といいます。こちらは猪狩です」どうせ黙っているだろうと思い猪狩の分まで紹介する。

「どうも」案の定、猪狩は軽く頭を下げてただけだった。礼儀を知らないわけではないが人見知りをする方で、たいてい猪狩に対する第一印象は良くならない。昔はもっと活発だった気がすると、奈美香は少し過去を回想した。

「ああ、木村君ね。彼も律儀だなあ。他の教授なんてもう来ないのに。あ、俺は阿久津彰つて言うから。昌弘とは高校、大学で一緒でさ。そうそう、“やしき”つてどういう字を書くの？ 家の屋敷？」
「いえ、弓矢の矢に、数式の式です」

五十代前半くらいだろうか。しかし若々しい雰囲気が出ていたし、

ずいぶんと気さくな人だなと奈美香は思った。

「さて、じゃあまた後で」そう言って阿久津は階段を下りようとする。

「あ、私たちも行きます」ここにいっても何もする事がないので二人も食堂へ向かう事にした。

3、

食堂にはすでに何人かの人がいた。木村もいる。テーブルの上にはすでに料理が運ばれており、オードブルが大小さまざまな食器に盛り付けられ、湯気が美味しそうな匂いを鼻まで運んできた。

「あ、阿久津さん。お久しぶりです」こちらに気づいた木村が阿久津に挨拶をする。

「そうだね、年に一回しか会わないから」

「阿久津さんも大学の関係なんですか？」

木村と阿久津が親しそくに話すので奈美香は疑問に思った。

「いや、俺は普通のサラリーマンだよ。俺と木村君だけ皆勤賞だから、もう覚えちゃったんだ」

阿久津は白い歯を見せて笑った。事前に聞いた話ではこのパーティーは評判が良くないので、阿久津は物好きな方だといえる。確かにこの四人を除けばあとは三人しかいない。

二十代前半と思しき女性と中年の女性が二人。そのうちの一人がこちらに向かってくる。

「あら、彰君じゃない。久しぶりね」女性が阿久津に向かって微笑んだ。

「ん？ 京子じゃないか。五年ぶりくらいか？」

「ええ、そのくらいね。えっと……」奈美香たち三人を見て少し考へ込んだ。「あ、あなたには一回会ったわね」彼女は木村に尋ねた。「ええ、教授のパーティーで。こちらは従妹の矢式とその友人の猪狩君」

「どうも。矢式奈美香です」本日何度目になるだろうか。自己紹介

をして会釈した。猪狩もそれにならった。

「はじめまして。瀬戸京子です。」瀬戸はにっこりと笑って礼をした。「それにしても少ないわね。久しぶりに来てみたんだけど」

「まあな、忙しい奴もいるし、愛想尽かしたやつもいるからな。怜次とか来そうだったんだけどな」

「懐かしいわね、怜次君。そういえば……」

二人が昔話に花を咲かせてしまったので、三人はその場を離れる事にした。

「うーん、今年は特に少ないなあ」木村が呟いた。

「あの人は？」奈美香はソファーに座っている、女性に目をやる。

「あの人は教授の奥さんだよ。静江さん。で、あっちが娘の結衣さん」

「ふーん。もしかして、これで全員？」

「そうみたいだね。あとは教授だけか。あ、来た来た」

ホールとは別の奥の扉から、中年の男性が出てきた。彼が佐加田教授ということか。

髪は豊かだが若干白髪が混じっている。中肉中背で普通すぎて表現しづらい。ヒールを履いた静江より少し高いくらい。痩せているとは言い難いが、決して太っているわけではない。

「おうおう、今年は少ないねえ」入って来るなり教授は顔をしかめた。

「あんたの破天荒さについていけないのさ」阿久津が笑って冷やかす。

「ということとは、君らは私についてこれる猛者というわけだ」教授は声を上げて笑った。「さて、別にどうしようって事はない。

まあ、乾杯くらいはしておこうか」教授がそう言つと、静江が教授のグラスにシャンパンを注ぐ。客の方は、いつの間にかやってきた柏田が、注いでいた。

「じゃあ、乾杯」形式ばった事が嫌いなのだろう。適当に挨拶を済ませると、グラスを上げ、口につける。

「では、皆さん遠慮せずにお食べ下さい」静江の方が口を開いた。奈美香は事前に聞いていた情報から、食べるのを少し躊躇った。しかし、皆が食べるのを見て食べ始めた。

「うわあ、美味しい！」

「ワサビは入ってないみたいだね」木村がそういったのが聞こえたが、もはや奈美香にはどうでもよかった。あまりに美味しいので警戒するのがもつたいない。いや、この手は去年使ったから、今年はむしろ安全だろう。おまけに立食なので、周りに自分がどれだけ食べたか知られにくい。食い意地が張っていると思われるくないので好都合だ。

「ずいぶん食べてるな」

しばらく食べていると隣で猪狩が話しかけてきた。見事にばれていたようだ。

「いいじゃない、美味しいんだから」

「それはそうと、この後何かあるのか？」

「え？ さあ、何も無いんじゃない？」

「なかったら俺を呼ばないだろ。藤井はともかく新川を呼ばないのは面倒な事があるときだ。それに電話で俺が即決したときの反応を聞けばなおさらだ」

猪狩の言うとおりだ。しかし、奈美香自身料理の美味しさにすっかり忘れていた。とはいえ、本当に何も起こらないのではないか。

「ああ、忘れてた。教授が悪戯好きっていうだけよ。去年はデザイナーがロシアンルーレットになってたらしいわよ」

「たちの悪い悪戯だな」

「まったく、今年は何も起こらないといいけど」

「毎年やっているんなら、望みは薄いな」

そういえば一昨年以前は何をしていたのだろう。すぐそばに木村がいたので聞いてみた。

「ねえ、良兄。一昨年はどんな悪戯だったの？」

「ん？ ああ、なんだっけな……そうだ、確かお土産がびっくり箱

「なってたんだ」

「……くだらない」

「うん。で、その前が酷かった。玄関の前が落とし穴で、見事に僕がはまった」

「……危険ね」

「その前は、部屋に血みどろ死体が……」

「え!？」

「と思ったらマネキンだった」

「……………」

「その前は……」

「もういいわ……」

奈美香は頭が痛くなってきた。これほど無意味な悪戯に熱心な人種を奈美香は見たことがなかった。油断してはいられないとつくづく思った。

「あ、デザート」

猪狩の声に反応して彼の視線を追うと、柏田がデザートを運んできた。

「やった!」小さくガッツポーズ。

奈美香は数種類あるデザートの中からモンブランを選んだ。そして、嬉しそうに口へ運ぶ。

「!!!!!!」

奈美香は急に声にならない声を上げて暴れだした。食堂にいた皆が驚いて、彼女に視線が集まる。あまりに突然だったので声を失ってしまったが、数秒後には教授が大声で笑い出した。

「二年連続で木村君の学生か! ツキがないな、木村君!」

「ツキがないのは僕じゃないですけどね」

木村は眉間にしわを寄せた。奈美香が後になってどんな賠償を求めるのか不安で仕方がなかった。

「お、うまい」

猪狩はプリンを食べて呟いた。

三章 invisibleな暗夜

1、

「あつつのハゲー！」

奈美香は猪狩の部屋で怒鳴り散らしている。せつかくの晚餐をワサビ入りモンブランで締めることになったので、たいそう気分を害したようだ。

「ハゲてはいない」

そんな奈美香に対しても猪狩は冷静に対応する。もちろん禿げていないのは奈美香もわかつている事だ。単にあの年代の男性を侮辱するのに一番適した単語というだけであろう。

それにしても、あえて二年連続で同じ手を使ってきたか。奈美香は見事に引つかかってしまったわけだ。猪狩は他人事のように見ていた。現に他人事なのだが。

「うるさい！！ あーもう、最悪よ！ あんなに美味しい料理だったのに台無しだわ！」

「わかったから、静かにしてくれ」

「これが静かにしてられる！？ 無理よ無理！ ああ、ぶん殴ってやりたい！」

奈美香はベッドの枕を思いっきり殴りつけた。バフツという心地よい音をたてたが、もし人間相手ならかなりの痛手を負わせられるだろう。

扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ！」

猪狩の部屋にもかかわらず、奈美香が不機嫌な声で応答する。遠慮がちに扉が開くとそこには教授の娘の結衣が立っていた。長い黒髪と、薄化粧がおしとやかな雰囲気を出していた。大和撫子とは彼女のような人を指すのだろう。

「あ、えっと……結衣さんでしたっけ？」先ほどとはうって変わっ

て奈美香は口調を直し、礼儀正しく応答した。

「はい、あの、入っても？」結衣が躊躇いがちに聞いた。

「ええ、どうぞ」

奈美香は結衣を招き入れる。猪狩の部屋ではあるが。

「あの、父が大変失礼な事をしました。すいませんでした！」結衣は深々と頭を下げた。

「あ、いえ、結衣さんが謝ることじゃないですよ」

あまりに唐突に謝られたので、奈美香はうつろたえて、とりあえずフオーした。

「私たちも父に付き合わされて、ちょっと迷惑しているんですけど……」結衣は苦笑した。

「大変ですね」

「ええ、それじゃあ、本当にすいませんでした」

結衣はもう一度頭を下げて部屋を出て行った。

「律儀な人ねえ、わざわざ謝りに来るなんて。でもなんで康平の部屋にいるってわかったのかしら？」

奈美香は首を傾げた。猪狩は「あれだけ騒げばわかるだろう」と言いたかったが顰蹙を買っただけだったのでその言葉を飲み込んだ。

突如廊下から悲鳴が聞こえた。この声は結衣である。

「何！？」

二人は部屋を飛び出した。廊下で結衣がうずくまっている。木村、阿久津、瀬戸も飛び出して出てきた。

「一体どうしたの！？」瀬戸が困惑した表情で聞いてきた。

結衣は廊下の奥を指差した。皆がそちらを向く。窓の向こうに別館の窓が見え、明かりが点いている。三階に上がってきたときは点いていなかったはずだ。その窓から椅子に座っている教授が見えた。しかし、普通の状態ではなかった。

窓から見えるそれは日常を切り取った絵画のように見えた。教授は椅子に深く腰掛け、右手は肘掛けに、左手はすぐ横のテーブルの上に置かれている。

いかにも、テレビを見ていて眠ってしまった、というような姿。

ただ、そこにある唯一の非日常の部分。教授の左胸にはナイフが。

「そんな……」阿久津は絶句している。

奈美香は窓に映る教授の姿を見て、走り出した。

奈美香は階段を駆け下りる。後ろから猪狩、阿久津、瀬戸が続いた。二階で柏田とぶつかりそうになった。

「っと、どうしたんですか!？」二階にも悲鳴が聞こえていたらしく困惑の表情が見て取れる。

「教授が別館で刺されたんです!」奈美香は足を止めずに説明した。「な!?! そんな!?!」柏田も驚き後に続いた。

玄関の扉を乱暴に開ける。ゆるい傾斜を駆け上がり、階段は二段飛ばしで駆け上がる。飛ぶように、三度で上りきる。

別館は予想通り狭く一部屋と階段しかなかった。階段を駆け上がり、三階へと向かう。やたらと長く感じる。なぜ目的地というのは、急げば急ぐほど道のりが長く感じるのだろうか。やっとの事で部屋にたどり着き奈美香はドアノブに手をかけるが回らなかった。

次に猪狩がたどり着いた。遅れて阿久津、瀬戸、柏田が到着した。歳のせいだろう皆息を切らしている。

「鍵がかかっています」奈美香は柏田に向かって言った。

「え? ここは普段鍵をかけないのですが……。取ってまいります」そういうと柏田は階段を駆けていった。しばらくして木村が上ってきた。

2、

木村は本館の三階に残った。皆と一緒にいこうとしたときに誰かに服の裾を引っ張られた。振り返ると結衣が地面にうずくまったまま、裾をつかんでいた。ここに一人残していくのも悪いと思いその場にとどまった。

こういったとき何と声をかければいいのだろうか？ 大丈夫？ 落ち着いて？ 適当な言葉が見つからないので黙っていた。なんとなく廊下の窓に目をやる。

「あれ？」

別館の窓のカーテンが閉まっていく。犯人がまだ中にいるのだろうか？

「大丈夫かな？」もし犯人が中にいるのであれば奈美香たちが危ない。もう部屋に着いたころだろうか。それでも知らせた方が良くかもしれない。

「あの、お嬢さん、僕行きますけど大丈夫ですか？」

結衣は頷いた。「私は部屋で休んでいます……」

それを聞いて木村は走り出した。たかだかすぐ隣にある別館だ。三階から降りて別館に移り三階から上がっても二分ほどしかかからなかった。別館の二階と三階の間の階段で柏田とすれ違った。

「鍵を取ってまいります」彼は走りながら説明した。

3、

「あれ？ 良兄」奈美香が首を傾げた。「ここ、鍵がかかっているの」

「そうなのか？ 君たちが走っていつてから、部屋のカーテンが閉められたんだ」

「え！？ それって……」瀬戸が驚き目を見開いた。

「たぶん、犯人は中にいる」

この場にいる人たちに緊張が走る。

「おい、どうする？」阿久津が聞いた。

「武器を持っているかもしれませんね。人を殺しているくらいですから」

「警察に連絡した方がいいんじゃない？」今度は瀬戸が不安そうな顔で聞いてきた。

「ええ、もちろん。でもどれくらいかかると思います？」

ここは山の中の別荘だ。車でも一時間はかかるだろう。

「それまでここで見張っているわけにもいきませんし、相手も籠城する気なんてないでしょう。けどナイフで刺しているから、拳銃は持っていないでしょうし、頑張れば何とかなるんじゃないでしょうか」木村は冷静に説明したが、冷や汗をかいている。

柏田が上がってきた。息を切らして額には汗が浮かんでいる。

「柏田さん、鍵！」奈美香が催促する。

「奈美香は下がってなさい。猪狩君も」木村が奈美香を引き止める。

「私が行きます。こう見えても武術をやっていたので」柏田がそのまま前へ出る。

「いえ、僕が。ご老体にはきついでしょう」

その通り、鍵を取りに行った事で柏田は息が切れている。柏田は面目ないと言つて木村に鍵を渡した。

奈美香は目で訴えたが渋々引き下がった。木村は鍵を開ける。心なしに、震えているように見える。そつとドアノブを回し、少しだけ開けた。

「……え!？」

木村は驚いたような声を上げ、ドアを全開に開いた。

そこには、誰もいなかった。

真ん中にはテーブルと一人がけのソファー、テーブルの上にはリモコンが置かれている。壁際には本棚、テレビなど少し家具があるだけ、本棚にはあまり本は入っていない。

「なんで!？　ここ、三階よ？」奈美香は驚きのあまり口が開きっぱなしになっている。他の面々も同じようなものだ。その中で、柏田がハツとなつて口を開いた。

「奥様とお嬢様……」

ここには、木村、奈美香、猪狩、柏田、阿久津、瀬戸の六人。つまり、本館には静江と結衣、か弱い女性が二人だけである。

「急ぎましょう」

木村が言い出し、六人は急いで本館へ戻ることにした。

「一体どうなってるの？」

本館に戻る途中で瀬戸が言い出したが、急いでいるので誰も答えない。それに、誰もがそれを知りたいだろう。

玄関に入るが異常はない。こちらには何も起こらなかったのか。ところが、段々と何かの匂いが漂ってきた。二階からのようである。

「血の匂いだ……」

急いで階段を駆け上がる。談話スペース、そこには、

心臓を一突きに刺され、椅子に腰掛けた、窓から見たままの佐加田教授の姿があった。

4、

警察がもうすぐ来る、それでいくらか安心できるだろう。猪狩と奈美香は猪狩の部屋にいた。教授を発見した後、すぐに柏田が警察に電話をかけた。幸い、電話が繋がらないといったミステリーの定番のような出来事は起こらなかった。

その後、結衣が部屋から出てきて、あの光景を目の当たりにしてしまった。何とか柏田や木村が落ち着かせたが、問題はこの後である。静江は体調が悪かったらしくパーティーの途中からずっと休んでいた。薬を飲んで寝ていたのでまったくこの惨事には気づかなかったらしいのだが、いつまでも黙っているわけには行かないので事情を話しに行ったところ、あまりのショックに卒倒してしまった。今は瀬戸が看病しているそうだ。

殺人鬼がうつっているかもしれないという事で一ヶ所に集まるうという提案があったが、奈美香がそれを丁重に断った。

「ねえ、どう思う？」

奈美香が話を切り出した。

「何が？」

「何がつて、この事件よ！ まさか、あんたも外から殺人鬼がやって来て死体消失トリックをお披露目した後、逃げてったとでも思ってるの！？」奈美香は憤慨して言った。

「まさか、そんなわけないだろ。明らかに、いや、明らかである根拠はないけど内部の犯行だろ」

「でしょ？ わざわざこんな山奥まで来て人を刺してあんな奇天烈な事やらかす人間がいるもんですか！」

奈美香はまくし立てるように言った。

奇天烈？ 今どき使わないな。と思ったが猪狩は突っ込まない事にした。それに内部の者の犯行だとしてもあんな奇天烈（あえて使う）な事をする理由はないだろう。

猪狩はため息をついて、

「落ち着け。人ひとり死んでるんだ」と言った。その言葉は猪狩にしては語気が強かったようだ。

「そ、そうね……」猪狩の言葉で幾分落ち着きを取り戻したようだ。「それにみんなわかってるだろ。ただ、自分たちの中に犯人がいるなんて思いたくないだけだ」

「そうだけど……」

「わかってるならいい。俺としては、あとは警察に任せたいんだが……」

「嫌よ、そんなの」奈美香はきっぱりと言った。

「やっぱりそうなるの？」

「どうやったのかしら？ どうやって、あたしたちが現場に着くまでの一、二分で死体を本館の二階に移したのか……」

奈美香はすでに冷静な時の、そして好奇心で思慮に耽る時の彼女に戻っている。この切り替えの速さは他人には真似できないだろうと猪狩は思う。

「窓と窓を縄で繋いでロープウェイみたいにするか……。ああ、窓を調べておくんだった。いや、でもそんなことできるかしら？ あ、

良兄が途中でカーテンが閉まったって言ってたわね。それじゃあ、もっと時間は短くなるわけだ……」

奈美香はああでもない、こうでもないと独り言のように意見を出していく。

「でも、二階の窓は現場とは端と端で静江さんや結衣さんの部屋を通るから、三階から降ろしたのかも……」

「錯視って知ってる？」猪狩が突然話し出した。

「え？ あの「II」に「H」を書くとき長さが違って見えるとか？」

「そう、それはポンゾ錯視だ。他にミュラー・リヤー錯視やツエルナー錯視が有名どころだ。矢印の向きで長さが違って見えるやつとか、平行線に向きの違う斜線を入れると斜めに見えるやつとか」

「……で？」

「いや、それだけ。俺が言いたいのは人間の感覚器官はそれだけ曖昧だっていうこと。その例が錯視だっていうだけ」

「はあ、それが事件と関係あるの？」

「さあ？ 関係あるかもしれないし、関係ないかもしれない。仮に関係あったとしても、今のところ事件を説明する事はできないね」

「……あんだ、なんかわかったでしょ」奈美香は猪狩をジト目で睨む。

「ノーといったら嘘になる。けど俺はできれば警察に任せたいし、別館に確認しに行かなきゃいけないくなる」

「じゃあ、行きましようよ。あたしもいろいろ調べたいし」

「いや、恐いから嫌だ」

「はあ？」奈美香は訳がわからず首を捻る。「警察に後で怒られるのが恐いの？」子どもじみた意見だと馬鹿にしているようである。

「馬鹿にすんな、そうじゃない。もし、もしだけど、俺の考えがあつていれば、そろそろ犯人は別館を」

そのあとは音にならなかった。強烈な爆音が響いてきたのだ。
「キャッ！？」何よ！！」

「ああ……たぶん別館だ」

二人は急いで外に出る。他の者も爆音に驚いて出てきている。外に出ると猪狩の予想通り、音源は別館だった。そしてその別館は今、燃えている。音を聞いた限り、ただの火災というよりも爆発に近い感じがした。一階が火元らしく今にも根元から倒れそうである。

そう、今にも。

「あ、危ない！！」誰かが叫んだ。いや誰もが叫んだ。慌てて皆が別館から離れる。そしてついに別館は音をたてて崩れ落ちた。

ベルリンの壁が崩れた時のような驚きと、ジェンガを崩してしまった時のような失望感が辺りを包んでいた。

「何なのよ、もう！」奈美香が叫んだ。

「消防車、呼んだ方がいいかな？」

猪狩はいたって冷静だった。上階はまだ火が移っていないかったのだ、その残骸が火の勢いを殺し、あまり火は広がっていない。本館は壁が黒焦げに、瓦礫で一階の窓が割れただけで、奇跡とも呼べる状態だった。

遠くから、サイレンの音が聞こえた。

四章 public な捜査

1、

「火事なら消防車を呼んでくれよ」

パトカーから出てきた男が言った。どこかで聞いた事のある声、何度も聞く羽目になるとは。

「また君か」

「またあなたですか」

彼の名前は伊勢浩太郎。道警の刑事で猪狩とは去年の夏に一度、秋に一度会っている。

「殺人だって聞いたけど」

「ええ、ややこしいですよ」

「殺人は何だってややこしいよ」そういうと他の捜査官と共に館へ入っていった。阿久津や瀬戸は他の捜査官に促されすでに館へと戻っていた。「君たちも早く入りな」

「また伊勢さんね。私たちも捜査がしやすいわ」すでに奈美香は好奇心で目を輝かせている。

「……早く入ろう」猪狩は失望の念でそれしか言えなかった。

中ではすでに捜査員が忙しそうに動いている。大部分は二階にいるのだろう、猪狩と奈美香はそのまま左の応接間へ通された。そこには今日館にいた者全員が集まっていた。阿久津と瀬戸が伊勢に向かって何かまくし立てている。

「まあ、お二人とも落ち着いてください」伊勢は困惑の表情で二人をなだめている。

「全員そろったので改めましょう」伊勢は猪狩と奈美香の二人を認めると言った。

「では……」。改めまして今回の事件を担当する伊勢と申します。よろしく願います。残念ながら皆さんの証言は不可解な所が多い

のもう一度順を追ってご説明願えますか？」

「だから！」阿久津が怒ったように言った。「別館の三階で殺された昌弘が消えて本館の二階に現われたんだよ！」

立て続けに奇怪な出来事が起こったためだろう。阿久津はかなり取り乱しているようだ。

「そこをもう少し細かく説明してください。誰でもかまいません」

伊勢はこういった、関係者を取り乱すという事に慣れているようで冷静に対応している。

しばらくの沈黙の後、木村が遠慮がちに口を開いた。

「じゃあ、僕が……。今日は教授が年に一度開いているパーティーでした。そのパーティーが終わったのが八時半頃でしょうか。よく覚えていません。そのあとは各自、自由にしていました。それで九時頃だと思いますが、これも良く覚えていません。結衣さんの悲鳴が聞こえたんです」とここまで説明した。伊勢は手帳にメモしている。

「確かに九時頃でした。お嬢様の悲鳴が聞こえる少し前に時計を見ましたから。八時五十五分でした。その後、そんなに経っていないかったので九時にはなっていないかっただと思います」柏田が補足した。

「それで、僕は部屋にいたのですが、部屋からすぐに出ました。三階にいた皆さんも出てきたと思います。廊下で結衣さんがうずくまっていました」

「ちよつと待つてください。その時三階にいたのはどなたですか？」

伊勢が木村の説明を遮って質問した。猪狩、奈美香、阿久津、瀬戸がそれぞれ応答した。伊勢はそれも手帳に書き込む。

「それで、結衣さんが別館の方を指差しました。窓から教授の姿が見えたんです。心臓を刃物で刺されていました。慌てて皆さんが別館へ向かいました。ただ僕と結衣さんは残りました。ずっとうずくまっている結衣さんを一人残していくのは忍びないと思ったので」

「結衣さんはどうして別館に気がついたんですか？」伊勢が結衣に質問する。

「はい……。私は矢式さんの部屋に行こうとしたんです。ただ、猪狩さんの部屋から声が聞こえたのでそちらに行きました。その時、窓は真っ暗でした。で、部屋から出たとき、階段とは反対方向でしたけど、廊下の奥の窓から別館の明かりがついているのが視界に入って、それで……」そう言うと結衣は俯いてしまった。なんとなく気まずい雰囲気が出る。

「……では」伊勢が咳払いする。「別館に向かった方、どなたか説明してください。」

「私はお嬢様の悲鳴が聞こえた後、三階に行こうとしたところで皆さんと合流しました。事情を聴いて別館へ向かいましたが、三階の部屋には鍵がかかっていました。普段はそんなことないのですが……。それで私が鍵を取りに戻りました。その時木村様とすれ違いました」

「？ 木村さんはなぜ別館に向かったのですか」

結衣を一人にしないように残ったのに別館へ向かった事に疑問を感じたらしい。

「ああ、忘れていました。みんなが出て行った後、カーテンが閉まっただけです」

「カーテン？」

「ええ、それで中にまだ誰がいるんだと思って、知らせた方が良かったんですけど」

「そのとき結衣さんはどうしましたか？」

「自分の部屋に行きました……」結衣は俯き加減で答えた。

「何か聞こえたとか、気になった点はありませんでしたか？」

「いえ……。気が気じゃなかったものですから、何も気づきませんでした。けど大きな音だったら気づいたと思うので、何もなかったと思います」

「そうですか。では、柏田さん。鍵はどこにあったのですか？ そのとき、不思議な点は？」

「鍵は昌弘様の部屋にいつも置いてあります。取りに行ったときは

まだ何もございませんでした」

まだ何もなかったというのは教授の死体がなかったという意味だろう。

「そのまま、別館へ行き鍵を開けましたが、誰もおりませんでした。そのとき、本館の方に奥様とお嬢様しかいないことに気づいてすぐに戻りました。そこで……」そこで柏田は言葉を詰まらせる。

「教授の遺体を発見しました」奈美香がその後を補った。彼女の性格からして、発言したくて仕方がなかっただろう。

「……まことに不可思議な事件ですが、今はそれを鵜呑みにしましょう。では最後に被害者を見たのはどなたでしょうか？」

誰も反応しなかった。最後に被害者と会ったのなら疑いを向けられるのは当然なのだから仕方ない。それとも誰も心当たりがないのか。

「私が最後に見たのはパーティーが終わるときです。その時は皆さん一緒にでした」やがて奈美香が説明した。

「では、パーティー以降、つまり八時半以降にあった方は？」

また誰も反応しない。お互い顔を見合わせたり首を振ったりしているが、教授を見た者はいないようだ。

「ではみなさん、八時半から九時までの間、どこにいましたか？」

何も皆さんを疑っているわけではありません。形式的なもので、よろしく願います」

氣を立てないようにするためにあらかじめ「形式的なもの」と説明したようだ。それでも阿久津は氣に入らないようだったが、渋々応じた。

「俺は京子と一緒にいたよ。俺の部屋で昔話をしてたんだ」

「昔話なら被害者を誘わなかったんですか？」

「いなかったんだよ！ それにあいつとは毎年顔合わせてるからな」

「私はパーティーの後片付けをしていました」今度は柏田が話し始めた。「手伝いの者と二人でした。ある程度目処がついたので、残りを任せて二階へあがった所で悲鳴を聞きました」

「僕は自分の部屋にいました」と木村。

「私もです。自分の部屋にいました」結衣が続ける。

「私たちも部屋にいました。二人一緒です」奈美香も猪狩を示して説明した。

「私は……」静江が話し始めた。「体調が優れなかったもので、パーティーの途中から部屋で休んでいました……」

今は自分の夫が亡くなったこともあつてかなおさら顔色が悪い。

「わかりました。ご協力ありがとうございます。これから個別にお話を聞きたいと思います。その他の人は、しばらくは自分の部屋でお休みになつて結構です」

2、

「でさ」猪狩は言った。「なんで俺の部屋に来るの？ 自分の部屋行けよ」

個別の聴取を終えた後に、奈美香が猪狩の部屋に入ってきた。聴取は阿久津の次で、「何回も同じ事聞きやがって！ さっきも答えたじゃねえか！」と愚痴をこぼしていたのを聞いた後で若干気が重かったが、伊勢に全体での聴取で話した事を確認されただけで終わった。

これも一応「同じ事を聞かれている」事になるのだが、明らかに便宜が図られている。

猪狩としては、伊勢がなぜここまで自分を贖うのかはわからなかったが、面倒事が一つ減ったので気にする必要はないという結論に達した。

「いいじゃない、別に」奈美香は当然とばかりに言った。猪狩は不満げである。「ところで、何かわかった？」

「静江さんと結衣さんにはアリバイがないね。けど、どっちにしろ不可能だろ」

「だから、何かトリックがあつたのよ！！」奈美香は語気を強めて言った。猪狩がやる気を出さないのが不満らしい。

「そもそも、現に起こってしまったのだから仕方がないけど、ああいったトリックを実行するのはかなりハイリスクなんだ。手間もかかるし、成功するかもわからない。不測の事態に対応できないし、痕跡が残る。前の事件のときにも言ったけど」

「でも、現実が起こってるじゃない」

「そう、そこが解せない」

「解せないって、わかんなくなつて実際に起こってるんだから、どうやったかを考えなきゃ。そもそも、何か思いついてたんじゃないの？」

「いや、あれじゃ全く説明できない」

「でもわかつてることはあるんでしょ？」

「それを言ったら先入観となつてお前の思考を狭めるよ。実際俺もそこで思考が止まつてる。」

「うーん」納得していかないようだったが、奈美香はそれ以上追及してこなかった。

「けど、犯人が別館を壊したって事は、考えが合ってるのかなあ？」猪狩は首を捻る。しかし、すぐにいつものように言った。「まあ、何度も言うけど警察に任せればいい」

猪狩の言葉に顔をしかめる奈美香だが、何か思いついたようで、ニヤニヤ猪狩の方を見ている。

「やっぱり、伊勢さんに詳しい話を聞く必要があるわね」楽しそうに奈美香が言った。

「は？」

「はい、レッツゴー！」奈美香は満面の笑みでビシッとドアを指差す。

「嫌だよ！」

「はい、文句言わない。ゴーゴー!!」

そう言つて猪狩を部屋から追い出した。

「だからあ、行きたきゃ勝手に行けつて！」

「あんたがいた方が、都合がいいのよ」

「だいたい、まだ聴取中だろ」

「大丈夫よ。私が最後だったから」

そんなこんなで、二階へと降りていく、鑑識などの捜査官が大勢いる。最初二人を見ても一階に行くのだろうと、皆そのまま作業に戻ったが、その場に立ち止まる二人を見た一人が近寄ってくる。確か、伊勢の部下で池田という名前だったはずだ。

「あの、どうかしましたか？」池田が未だに新米の雰囲気から脱し切れていないあどけない顔で聞いてきた。

「伊勢さんいらっしゃいますか？」奈美香が答える。猪狩はまだふて腐れている。

「ちよつと待つてください」彼はそう言つと奥のほうへ向かった。少ししてかわりに伊勢刑事がやつてきた。

「どうしましたか？　つて。ああ、君たちか。事件について知りたいのかい？」伊勢は猪狩だと知ると言葉を崩した。

「はい、康平がどうしても知りたいつて」

「言つてない」

「うーん」伊勢は考える仕草をする。「教えたいのは山々なんだけど、あくまで君たち一般人だからね。詳しいことは話せないけど、それでもいいならどうぞ」

「被害者の死亡推定時刻は？」奈美香が質問する。

「うーん、それくらいなら。八時半から九時半の間だよ。つまり、参考にならない」

「死体に不思議な点は？」

「微妙な質問だね。答えていいのかなあ」伊勢は首を傾げる。「つて言つても検死待ちだけだね。教えられるかどうかは微妙」

「そうですか……」奈美香は次の質問を考える。「二階の窓の鍵はかかってましたか？」

「ああ、かかっていたよ。三階もね。けど、騒ぎに乗じて閉めることはできたろうしね。窓近辺からはまだ何も見つかっていないよ」

奈美香は考え込む。

「鍵はどこにあったんですか？」今度は猪狩が質問する。

「教授の部屋だよ。聞いてなかったっけ？」

「いや、そうじゃなくて。部屋のどこに？」

「ああ。机のすぐ上の壁に引っ掛けてあるんだよ。結構わかりやすい所だよ」

「そうですか。それと、教授は心臓を一突きにされていたんですよ？」猪狩が続けて質問する。

「ん？ そうだけど」

「という事は正面から刺されたんですよね？ 抵抗した様子はありませんでした？」

「ああ、いいところに気づいたね。君の想像通りだよ」伊勢は感心したように頷いた。

「ありがとうございます」猪狩は一礼すると踵を返して階段を上って行った。

「えー？ あ、ちょっと待ってよー!!」

3、

「ねえ、どういうこと？」奈美香はたまらず聞いた。

二人は再び猪狩の部屋にいた、猪狩は若干の抵抗を見せたが押し切られた。

「心臓を刺すにはどうしたらいいと思う？」

「え？」

「正面から刺すだろ？」

「当たり前じゃない。それがどうしたのよ？ どう考えたって顔見知りの犯行なんだから別に抵抗の跡がなくてもいいんじゃない？」

「じゃあ、質問。顔見知りだとしてもどうやって刃物を相手に見せずに近づく？」

「ああ、そうか……」

「でも、何の抵抗もさせずに心臓を刺す方法はある」

「あ！ 相手を眠らせるとか気絶させるとかね。事前に睡眠薬を飲ませたか、何かの薬品、たぶんクロロホルムとかかしら？ それを嗅がせるとか。スタンガンを使うっていう手もあるわね。刃物と違ってポケットに隠したまま近づけるし」

見たところ教授を刺した刃物は包丁のような大きな物で、ナイフと違ってポケットには隠せなかっただろう。

「そう。けどなぜそこまでして心臓を刺したのか？」

「うーん……。なんで？」

「わからない。けど、事件を解く糸口にはなる。」

「でしようね。とりあえずそれは置いておきましょう。今のところの最大の問題は、鍵のかかった部屋からどうやって本館に運んだのか、ね」

「運んだ後、鍵をかけたかもしれない」

「でも、あたしたちが部屋に行くまで五分とかからなかったのよ？」

「あの部屋の鍵が来るまで、中から物音がした？」

「いや、しなかったけど」

「だったら同じ事だ。俺たちが着いた時にはもう死体は消えていた。その間の五分、いや二、三分で事をやってのけたことになる。順序が逆でも困難な事という意味では同じだ。」

「うーん……」 先ほどから奈美香は首を捻ってばかりである。

「とりあえず、寝たいんだけど」

「は？」

「だから、寝たいんだよ。今ある情報だけじゃどうしようもないだろ」 猪狩は目を細め、眠たそうな目で訴えた。

「あつそ、じゃあ、オヤスミ」 そう言って奈美香は部屋を出て行った。

奈美香が出て行くと猪狩は一息ついた。

思考を元に戻す、という表現がある。思考があらぬ方向に向かっていったときに使う言葉、つまり人間の思考は本人の意図とはかけ離れて動く事があるということである。

例えば、考え事をしていたら樹形図のように派生していき、本筋からずれてしまったり。

例えば、すべき事があるのに、別の事を考えてしまったり。

例えば、本当は警察に任せたいのに、事件のトリックを考えてしまったり。

いや、どちらが本心なのだろう。人間は自分を完全に理解できるほど性能が良くない。けどそれは自己を護るためなのかもしれない。心理学を学んだ人間は、自分の行動、心理を理解できるがゆえに自己嫌悪に陥る事があるという。

自分を理解できないがゆえに自分を保つ事ができる。なんと皮肉なことではないか。人間は他人と接触し理解しようと試みる。しかし自分のことなど少しもわかっていないのだ。

ほら、また話が逸れた。これは例？だな。思考を元に戻そう。結局、どちらが本心なのか、考えているうちに猪狩は眠りについた。

4、

翌朝、特に変わったことは起きなかった。朝食を食べた後、警察に軽い取り調べを受け、連絡先を聞かれ、また連絡する事があると説明を受けた。それから、木村一行は車で帰る事となった。奈美香がいろいろと事件の事を話していたが、もちろん解決するはずもなかった。

「うーん、何かないかしら？」奈美香は首を捻って懸命に考えている。

「さあ、それにしても考えすぎじゃない？」

「いいのよ、これくらい」

「奈美香も僕くらい大雑把に生きればいいのに」木村は欠伸をしながら言った。たいして謎解きに興味はないようだ。

「良兄はいい加減すぎ!」

「O型だからね」開き直るように、はははと笑う。

「血液型と性格の関係は科学的に証明されてないわ」

「僕はあると思ってるけど。じゃあ、教授は何型だと思う?」

「…… B型」自分で言うておいて容易く予想できたのが悔しいのだから、惘然として答える。

「わかってるじゃん。ちなみに静江さんもわかりやすいよ」

「A型?」

「当たり前。結衣さんはわかりにくいかな? O型だよ。たしか柏田さんはA型で、牧田さんはA B型だったかな?」

「牧田さん?」

「ああ、もう一人の使用人だよ。柏田さんと後片付けをしていたっ
ていう」

「ああ、そう」

「奈美香はB型?」

「失礼ね! A型よ!」

「それってB型に失礼だ」猪狩が後ろから口を挟んだ。

「あら、ごめんなさい。B型の猪狩くん」

「そうやってB型はいつも蔑まれるんだ」そう言っ舌打ちした。

「ありがとうございます」猪狩は木村に礼を言った。先に奈美香の家に着いたので車には木村しかいなかった。

「うん、じゃあ学校で」

家に着くと蓄積された疲労が一気に襲ってくる。朝だというのにもう休みたい気分だ。しかし、なんだかんだで日常に戻る。

「ただいま」

「お帰り」母、涼子が迎える。父、勉は日曜だが仕事に行っていない。
いない。

「パーティどうだった?」

「散々だった」

「どつかで聞いた台詞ね」涼子はクスクスと笑っている。自分の息子が殺人現場に遭遇したなど夢にも思っていないだろう。

「タウンページはいらないよ」

よくもこんな皮肉が出たものだ、と夏の事件を少しだけ思い出した。

五章 private な調査

1、
「……なんだよ」猪狩は自分ができる精一杯の嫌な顔を奈美香に見せつけた。

一週間が過ぎた。藤井基樹、新川怜奈に事件の事を話し、例の如く推理大会のような事もあったが、特に何か思いつくでもなく平凡に過ぎていった。

猪狩はこの日も平凡に過ごす予定だった。少なくとも時間が一桁のうちは起きるつもりはなかった。

現在九時半。さすがに休日の朝早くから他人宅を訪れるという非常識な行動にはならなかったが、猪狩にとっては十分不機嫌になるに足る時間だった。

「車出して」奈美香は気にも留めずにつこりと微笑む。

なぜか猪狩の家の前には奈美香がいた。いや、なぜかはわかりきっている。

「うちはタクシーじゃないぞ」

「面白くないわよ、それ」

「うるさいな、何なんだよいきなり」

「いいから、出しなさい」

いつの間にか命令口調になっている。こうなってしまうてはどうしようもない。本当はまだ応戦可能だが、あとあと面倒になる。

「……ちよつと待ってろ」猪狩は応戦する事を諦め、支度に取り掛かる。一度玄関の戸を閉める。

「母さん、車貸して」

「なあに？ デート？」

「まさか、奴隷だよ奴隷」

「そんな事言わないの。はい、鍵。楽しんでらっしゃい」

「……行ってきます」

楽しめるものか。どうせ行き先は決まっている。再び戸を開けると妙に上機嫌の奈美香が待っていた。

「さて、行きましょ」

「最初は誰の家だ？」

「そうねえ、まずはここ」そう言って住所が書かれたメモを手渡す。

「瀬戸さんの家」

「へいへい」

なぜこんな目にあっているのだろうか。朝早くに起きた事ではない。もちろんそれもあるが。

確かに人生において多少の刺激は欲しい。しかし、それはハンバーガーに入っているピクルスのようなものでいい。なければいけないと思っていたのに実際にはないと物足りない。その程度でいいのだ。

何を好き好んで殺人事件に巻き込まれ、ましてや、なぜ捜査をしなければいけないのだ。それも何度も。子どもが裸足で逃げ出すピーマンの苦さなど要らないというのに。

2、

新興住宅街という言葉が似合う地域。存在を主張しすぎない草木が理路整然と道路脇に並ぶ。真新しい大きめの公園では子どもたちが無邪気にはしゃいでいる。そのすぐそばに瀬戸の家があった。

「はい、どうぞ」

瀬戸は二人のために紅茶を淹れてくれた。実のところ猪狩は紅茶が嫌いだったが、相手の親切を無下にはできないので、黙っていた。だく事にした。

「で、どうかしたの？」瀬戸は優しい笑顔で聞いてきた。

「ちよつと、事件の事でお話が……」奈美香がそう言うと、瀬戸は表情を険しくした。

「何をする気なの？ 素人が首を突っ込んじゃダメよ。そういう事は警察に任せなさい」悪戯をした子どもを諭すような、優しいげでは

あるが厳しい口調で瀬戸が言う。

「すいません。康平がどうしてもって言うので。彼、何度か事件を解決しているんですよ。この事件って、普通じゃないじゃないですか。普通の事件だったら警察に任せればいいんですけど、密室から死体が移動したり。こういうのを解くのが得意なんです」

もう、反論するのは、諦めた。

「うーん」瀬戸は納得がいかないようだったが、やがて「まあ、考えるのは自由だしね」と渋々了承した。「何が聞きたいの？」

「夕食の後、瀬戸さんと阿久津さんは二人で部屋にいたんですよ？」

「ええ、彰と二人で昔話をしていたわ。昌弘も誘おうとしたんだけど、見つからなくて」

「夕食の後、すぐですか？」

「ええと、まあ、そうね。一度、部屋に戻ったけど、五分もせず彰の部屋に行ったわ」

「？ 教授はいつ誘ったんですか？」

「彼、パーティーの終わるちょっと前からいなかったじゃない。で、上に上がるときに部屋に寄ったんだけど、いなくて。ちょっとは探したんだけど、まあいいかって」

猪狩は記憶を遡る。どうだっただろうか。確かに、教授はパーティーの終わりにはすでにいなかった気がする。柏田がパーティーのお開きを宣言していたはずだ。そして、二人が階段を上っていくのは見た。その後教授の部屋に寄った後に自分の部屋に行ったかどうかまでは見ていないが。

「その時、教授の部屋の中に入りましたか？」今度は猪狩が質問する。

「ちょっとドアを開けて中を覗いたくらいで、中には入っていないわ」

「じゃあ、一度も教授の部屋には入らなかったんですか？」

「いえ。あそこに着いた時に挨拶しに入ってたわよ。けど別にたいし

て変わった事はなかったわよ」

「そもそも、佐加田家ってどんな人たちなんですか？」再び奈美香が訪ねた。

「どんな、ってねえ……。昌弘は大学的时候はいいとこの坊ちゃんって感じだったわ。おとなしい優等生っていうよりは、甘やかされたヤンチャっ子って感じでその時からわりと悪戯好きだったんだけど。まあ、年を重ねるごとにタチが悪くなってるわね」そう言って苦笑する。「静江さんはよくわからないわ。なんであんなのと結婚したんだか……。別に、昌弘の事を悪く言ってるわけじゃないのよ。彼はとてもいい人よ。仲間内に一人はいて欲しいムードメーカーみたいな感じで。旦那には絶対にしたくないけどね」

「結衣さんはどうですか？」

「なんていうか……。母親似で良かったわ。でも彼女もあんまり知らないの。あの家族に会ったのは五年ぶりだから。彰に聞くといいんじゃないかしら、毎年パーティーに出ているらしいから」

「そうですか、わかりました。あ、紅茶ご馳走様でした」

瀬戸宅を後にした二人は次に阿久津に話を聞くことにした。猪狩はささやかな抵抗を見せたものの徒労に終わり、おとなしく運転する事にした。

先程とは別の住宅街の一角、標準的な一軒家のうちの一つが阿久津宅だった。奈美香は呼び鈴を鳴らす。

「はい」どこか幼さのある声が応答した。

「矢式と言いますが、彰さんいらっしゃいますか？」

「ちょっと待ってください」声が遠ざかる。遠くから「お父さん！」と呼ぶ声が聞こえた。しばらくすると扉の鍵が開き、阿久津が出てきた。

「どうしたの？」阿久津は不思議そうな顔で二人の方を見ている。一度会っただけで、特に親しくなったわけでもない。不思議に思うのも無理はないかもしれないそういう意味では瀬戸は順応性の高い

人物だといえる。

「ちよっとお尋ねしたい事がありました」

「ん？ 先週の事？」

「まあ、そうですね」

「いいよ、入って」

二人はリビングに通された。阿久津の奥さんが紅茶を淹れてくれた。猪狩はまたしても苦手な紅茶と対面する事となったのだが、眉を少し動かしたただけで何も言わずに戴くことにした。ただ、ほとんど手はつけなかったが。

「で、聞きたいことって？」

「静江さんと優衣さんについて知っている事があつたら教えていただきたいんですけど」

「ん？ 先週の話じゃないの？」

「あ、いえ。大体は瀬戸さんに聞いたんで。でも一応教えてくれませんか？」

「なんか、警察みたいだな。まあいいか」瀬戸と違いあまり気にしていない様子である。

阿久津の証言は瀬戸と一致した。新しい事は特にわからなかった。「やっぱり、一緒ですね。じゃあ、二人について聞いてもいいですか？」

「いいけど、なんか話すことあつたかなあ？」

「あ、その前に一ついいですか？」猪狩が口を挟んだ。瀬戸の家でも自ら質問をしていて割と活発な猪狩に奈美香は驚いたようだ。

「何だい？」

「阿久津さんはあの日初めてあの別荘に行つたんですか？」

「そうだよ。それが？」

「じゃあ、教授の部屋に入りましたか？」

「うん。来た時に一回。あと夕食後に一回。あ、二回目は覗いただけだ」

「瀬戸さんと一緒にですか」

「ああ、二回目はそうだよ」

「ありがとうございます。あ、話し戻していいよ」猪狩は奈美香に先ほどの続きを促す。

「えーと、あの二人、実は教授と仲が悪かったとかはありませんか？」

「ないと思うけどなあ。静江さんはかなり献身的だし、結衣ちゃんだって大人しいいい娘だよ」

「そうですか……」

「あ、でも静江さんってああ見えて昔は結構気が強かったんだよ。」
「そうなんですか？」

「うん。昌弘に負けず劣らず我が強いっていうか。その頃は喧嘩もけっこうしてたし、仲が悪いつて言ってもいいかもしれないね。でも二十代の頃の話だよ。そうそう、一回もの凄い喧嘩した事があつたっけ。いつからかな、ああいう大人しい性格になったの？」阿久津は思い出そうと頭をかいている。

奈美香はいえ、仲が悪かった時期があるという情報は耳寄りだが、あまりにも昔の事なので若干どうでも良い、といった風で密かに顔をしかめている。

「あ、結衣ちゃんが生まれたあたりかな？ そのちょっと前かも。とにかく、親としての自覚が出たんでないかな？」

「そうなんですか」奈美香は作り笑いをした。

「どうしたのよ？ 教授の部屋がどうしたっていつの？」車に乗り込みながら奈美香が聞いた。

「教授の家には行く？」奈美香の質問を無視して猪狩が質問を返す。
「うーん。私たち一般人だから、さすがに遺族に話を聞くっていうのもね……」

「じゃあ、調べなきゃいいのに……」猪狩は奈美香に聞こえないように呟いた。

「仕方ないから、そっちの方は伊勢さんから聞きだしましょ！」

「じゃあ、全部そうすればいいのに……」今度も微かに呟いたが奈美香に聞こえてしまったようだ。

「うるさいわねっ！！　こういうのは自分で調べるのが一番いいのよ！　それより、教授の部屋がどうしたっていうのよ？」

「別に。ただ、瀬戸さんと阿久津さんにも犯行が可能な事がわかっただけ」

「……全然わかんない」

「たいした事じゃないよ。あの三階には鍵がかかっていた。その鍵は教授の部屋のわかり易い所にあった。あの二人は教授の部屋に入った。だから、あの鍵を見つけて鍵をかける事はできた。」

そもそも、俺たちがあの部屋の前に来たときには中で物音はしなかったから、その前に死体が移動した事になる。ということはあの部屋に鍵がかかっている必要はない。

鍵がかかっていたのはあくまで、あの不可解な現象を修飾するためのものではない。たまたま鍵を見つけて利用しようとしただけかもしれない。そういう意味であの二人のどちらかが、教授の部屋で鍵を見つけて初めて、鍵をかけるという事を思いついたかもしれないという事。

どうやったかわからない以上、あそこに行って初めて犯行を思いついた、という類のものかもしれない。だから、あの二人にも犯行が可能だったって事。以上」猪狩は箇条書きのような口調で一氣に話した。

「で、どうやったかはわかったの？」

「さあ？　それがわかってたら俺はこうして運転してないわけだし」

3、

三日が過ぎた、水曜日。猪狩、奈美香の二人は水曜日に授業を一つしか入れておらず、昼からは暇となる。学食も飽きたし、どこかで昼食を取ろうかという話になっているとき、見慣れた車を見つけた。

「これって？」

「ああ」

「やあ」後ろで声がする。案の定、伊勢だった。被害者は〇大の教授だから、聞き込みに来るのは当然である。「もう帰るの？」

「ええ、授業が終わったんで。伊勢さんは昼食もう食べました？」

「いや、まだだけど」

「よかつたらご一緒にしませんか？」

「いいけど、どこに？」

「近くに美味しいスープカレー屋さんがあるんです」

「いいよ、じゃ、乗って」

「何かわかりましたか？」店に着き、注文を済ませたところで奈美香が単刀直入に聞いた。

「君のそういうところ好きだよ。僕の立場理解してあえて聞いて来るんだから」伊勢は苦笑した。「何というかね、報告書が書けない死体が瞬間移動したなんて馬鹿げてるからね。何か仕掛けはあるんだろうけど。まあ、別館を爆破したのはその証拠隠滅だろうね。手掛かりゼロだよ。」そう言ってお手上げのポーズをした。「おまけにもう一つ。教授の死因はなんだと思う？」

「失血死とかじゃないんですか？」

「ショック死」そう言っただけ息をついた。「腹部に火傷の痕があったからスタンガンによるものだと思うけど」

「気絶させようとして殺しちゃったって事ですか？」

「いんや。推理小説とかではよくあるけどスタンガンじゃ気絶しないんだよ。ちなみにクロロホルムもよく出るけど、あれも嗅いでも気を失う事はないよ」

「え！？ そうなんですか？」奈美香は驚いて目を見開いた。猪狩もそれは知らなかったようで驚いた風に眉を少し上げている。

「おまけにスタンガンは殺傷能力も低い。体の弱い人が受けると死亡する事もあるけど、教授はいたって健康体だった。おそらく改造

して電流を上げたんだろうね」

「ってことは最初からスタンガンで殺すつもりだったんですか？」

「そういう事になるね。でもそうだとするとなぜ心臓を刺したのがわからない」

「うーん。吸血鬼の心臓に杭を打つのと似たような感じですかね？」

奈美香が言ったが、苦し紛れの意見だったようで、釈然としない表情である。

「杭ならわかるけど、刃物を刺すなんて話あった？」

「そうなんですよね……」

「で、さっぱりだから当面は動機の方から探っているけど、全然出てこない」

「全く、ですか？」

「今のところね。あの六人、君らを入れれば九人か、警察って無駄が多いもんで、その六人以外にも被害者の周りを調べなきゃいけないんだけど、全然だね」

「その六人は？ えっと、静江さん、結衣さん、柏田さん、阿久津さん、瀬戸さん、あとは……」

「使用人の牧田洋子。君らは見てないだろうけど」

「で、どうなんですか？」

「まず、家族関係は良好。近所、もちろんあの別荘じゃなくて本宅の方ね。周りの話を聞いたけどいい話しか出てこなかったよ。夫婦関係、親子関係ともに良好、柏田も牧田も証言している」

「家政婦は見た！ 的なのは？」

「ないない。静江さんは献身的な奥さんって感じだし。結衣さんも特に悪い話はないかな？ まあ、ちょっと疎遠な感じはするけどあの年頃の親子ってそんなものだろう？それに、家庭の事情って話しくいだろうから、実際はわからないけどね。で、柏田は佐加田家に驚くほど従順。もうびっくり。何せ、かれこれ三十年以上働いてるからね」

「て事は二十代から？」

「ああ、柏田は大学中退なんだ。授業料が払えなくなってるね。途方にくれている所を拾われたらしい。被害者の父親にだね。彼は癌でもう亡くなってるけど」

「瀬戸さんと阿久津さんは？」

「ここ数年は年に一度のあのパーティーくらいでしか会ってなかったらしい。特に瀬戸は五年ぶりだから、シロだろうね。何かあるとしたら阿久津かな？ 高校からの付き合いで大学卒業後も結構付き合いがあったらしいから、家族以外では一番身近な人物だね。もうちょっとすれば何か出てくるかも」

「そうですね……」

料理が運ばれてきた。三人は食べながらも会話を続ける。

「牧田さんはどうですか？」

「彼女はまだ調査中。まだ、あそこで働いて一年くらいだから、よく分かってない」

「あの……、報告書を見せてもらえませんか？」奈美香は遠慮がちに言った。

「まさか！ さすがにそれはできないよ」伊勢はそう言ってコーヒを飲む。しばらく気まずい沈黙が流れた。

「さて、ちよつとトイレ」そう言つて伊勢が席を立つ。「ああ、その鞆、絶対に見ないでね」伊勢はトイレの方に歩いて行った。

「この鞆の中に報告書が入ってるから俺の見てないところで見なさい、って事？」

「絶対に見るなと言つたのは空耳か？」よくもここまで都合よく解釈できるな、と猪狩は呆れを通り越して感心した。しかし事実、そういう意味合いなのだろう。

奈美香は伊勢の鞆の中から分厚いファイルを取り出した。しかし、伊勢が報告書を書けないと言つたとおり、事件の概要については少なかった。

死亡推定時刻は八時半から九時半の間。死因はスタンガンの電流によるショック死。スタンガンは見つかっていない。さらに包丁で

心臓を正面から刺されている。包丁は量販店にある一般的なもので、佐加田家にあったものではない。指紋はなし。現場からはB型血液のみが検出されたため、被害者の血液のみと思われるが、現在検査中。

「なんで殺した後包丁で刺したのかしら……」

別館から被害者が移動した事は一応書かれてはいるが、やはり非現実的な事は書きづらいのだろう、信憑性の薄いものとして書かれていた。

残りの情報はすでにわかっていた事がほとんどだった。

佐加田昌弘はパーティーの途中、八時二十分頃を最後に目撃されていない。柏田も牧田も見えていないという。

佐加田静江は体調不良を訴え、八時頃に自室に戻り、薬を服用して就寝した。薬は風邪薬と睡眠導入剤で行きつけの病院から処方されたものだった。数日前から体調が悪かったらしく、その時に処方されたものである。

柏田智宏と牧田洋子は八時半にパーティーを終えた後、後片付けをしていた。その後、牧田一人に任せて、柏田が二階に上がろうとしたところで、三階で悲鳴を聞いた。

牧田はずっと後片付けをしていたが、証拠はなし。ただし、作業の進行度から見てほとんど間違いはないと思われる。

残りの者は自室にいたと証言している。ただ、佐加田結衣は、九時前に猪狩の部屋を訪れている。

その他、当日の各人の行動などが調べられていたが事件発生時のものはこのくらいである。奈美香は報告書を鞆にしまった。ちょうど伊勢が戻ってきた。

「見てないよね？」伊勢が笑みを浮かべて聞いてきた。

「はい、もちろん」奈美香は笑顔で返した。

猪狩は一人コーヒを啜っていた。

4、

翌日の木曜日、奈美香は一講目の授業を終え、次の授業に向かう所だった。一番新しく建てられた五号館は一階のみ四号館と繋がっている。奈美香は四号館を経て三号館へと入り、そのまま230教室に入る。230教室はO大の中でも大きい教室で「ニーサン」と呼ばれている。くだらない駄洒落ではあるが、呼びやすいのでほとんどの学生がそう呼んでいる。他に四号館の150教室が「イチゴ」ないし「イチゴー」と呼ばれている。「イチゴー」だと単語として意味を成さないが、呼びやすければ良いらしい。

次の授業は従兄の木村の授業である。見た目の通りラフなので授業は非常に楽で、いわゆる「安パイ」と呼ばれる教員である。授業を大して聞いていなくても最後には何とかなる。

さらに何かの映像をスクリーンに映すためカーテンが閉められている。それが余計に睡魔を襲って耐え難い。上の空で授業を終えた後、木村の元へと向かう。

「良兄」

「ん？ ああ、奈美香か。何？ あ、ちょっと待って」そう言うと木村は壁のパネルのボタンを押した。カーテンが自動で引かれていく。

「あれからどう？」

「どうって何が？ それと、あれからっていつから？」

「事件の事よ！」

「ああ……。警察にいろいろ聞かれたけど、別に」

「ああそう。ねえ、やっぱり何も気づいた事ないの？」

「気づいた事って言ってもねえ……」

「じゃあ、教授を恨んでた人っていない？」

「知らないよ。僕みたいに教授に振り回されてた人ならいたろうけど」

「うーん」

「何かいろいろ考えてたみたいだけど何かわかったの？」

「全然。状況的に結衣さんか静江さんなのよね……。他の皆は私た

ちと動いていたし、牧田さんも片付けの進度からして、不可能っぽいし。けど、誰にしたってどうやったかがさっぱり」

「窓から橋渡ししたってのは？」

「一番妥当っぽいけど、どうやったって死体に手が届かないわよ。部屋の中に誰かいないと無理ね。そんな人いなかったのは私たちが見てるでしょ？」

「どこかに隠れてたかもしれないよ？」

「あのねえ……」奈美香はため息をついた。「覚えてないの？あの部屋に隠れる場所なんてなかったわよ。押し入れもクロゼットもなかったんだから」

「別館の教授は映像だったとか」

「見間違えるわけないでしょ」

「考えるのもいいけど、ちゃんと宿題出してね」

「宿題！？何それ？」

木村は深いため息をついた。「授業聞いてなかったんだね」

奈美香は教室を出た。先程に会話で気になる事があったが何だっただろうか。階段を下りながら考える。宿題……も気になるがそれじゃない。

「あー！」出口を通った所で奈美香が叫んだ。すぐハツとなって辺りを見渡す。幸い周りに人はいなかった。

「わかったわー！！康平に教えなきゃ」奈美香は携帯電話を取り出す。

「……もしもし？」

「康平？わかったのよ！」

「ああそう」いつも通りだが素っ気ない。もっと驚いてくれてもいいのに。

「そうなのよ！あ、でも待って。じゃあ、あれは……」いきなり壁にぶつかってしまった。

「リモコンでしょ？」

「ああ、そうか。……って、え？　じゃあ、わかってたの？」

「わかったっていうか、そうじゃないかなあって」

「一緒じゃない！　でもこれではつきりしたわ！」

「はつきりはしてないと思うけど」

「うるさいわねえ」

「で、どうするの？」

「どうしようかしら？」

「ま、もうそろそろ犯人が捕まってるだろうから、無駄だろうけど」

「えー！？」

「伊勢さんに言っておいたから」

「もう！！　何てことするのよ！！」

「だって、それが普通だろ？」

「う……」

「ということで、この話はおしまい。じゃあね」

「あ！　……あいつ、切りやがった」　奈美香は携帯電話を乱暴に仕舞うと、次の授業に向けて歩き出した。納得できない、もやもやを抱えながら。

六章 a m b i g u o u s な解決

1、

「……と言っわけ」

「いやいや、状況はわかったけど。さっぱりわかんないし。一体誰が犯人なの？」

いつものように藤井の部屋に四人は集まっていた。猪狩康平、矢式奈美香、藤井基樹、新川怜奈。猪狩が事件の概要について話したが、核心については触れておらず、怜奈は困惑している。藤井は考える事を半ば放棄している。早く続きを話せ、といった目で猪狩を見ている。

「で、結局誰が犯人で、どうやったの？」怜奈が続けて聞いた。

「奈美香、後頼む」奈美香もわかったのだから、華を持たせようというのが半分。単純に面倒くさいのが半分。

「えっとね」奈美香が得意げになって話す。「どこから話そうかしら……。やっぱり結論から言おうかしら。あのね、別館のあれは三階じゃなかったのよ」

「え？」怜奈は眼を丸くしている。

「は？　だって三階から見たんだろ？」藤井も納得できない様子。

「本館から別館へは緩い上り坂だったわ。玄関の段差も本館は三段で、別館は六段。三階までやたら長く感じたのは本当に長かったから」

「オイオイ。そんなんで……」

「上り坂で一メートルとしましょ。で、段差が一段二、三十センチとして三段で七、八十センチ。で、中の階段を一メートルくらいかしら。二メートル半あれば、一階分の高さが出来上がるわ。ということであの部屋は二階なの。」

おかしいと思ったのよ。お金持ちのお屋敷って聞いてたから、吹き抜けで高い天井にシャンデリアを想像してたのよ。けど、実際に

は普通の高さだったわ。一応吹き抜けにして、高そうな装飾とで誤魔化してたけど。で、それでいて三階建て。おかしいとこだらけよ」

「でも、どうやって別館から本館へ死体を移したの？」

「ああ、それはね。私も康平も見落としていたっていうか、失念していたっていうか。「なぜ」を考えれば簡単だったんだけど」

「なぜって？」

「なんで、本館の三階と別館の二階が窓を通して繋がっていると思う？ これは偶然の賜物？」

「偶然……じゃあねえよな。段数変えたり階段延ばしたりしてるもん」

「そう、これは明らかに恣意的なものよ。ばれないように玄関側の面には窓がないしね。じゃあ、誰がこんな事をしたの？」

「それは、教授？」

「当たり前。じゃあ、なぜ？」

「あ……」藤井が声を漏らした。

「……悪戯」怜奈が呟く。

「正解。では、何の悪戯？」

「もしかして……」二人が声を揃えて呟く。呟きで声が揃うのはかなりめずらしいのではないか。

「そう、死体の瞬間移動って所かしら？ 結局生きてるんだけど。かなり馬鹿馬鹿しいわね。」

要するに、みんなが様子を見に別館の三階に上がっていったところで二階にいた教授がこっそりと本館に戻るのよ。もちろん良兄も三階に上がってからね。そして何食わぬ顔でみんなを迎える。

鍵は必要なかったんじゃないかって推測もあったけど、みんなを足止めするために必要だったわね。

で、最初のあの胸の包丁は作り物よ。服に血糊と柄をくつつけたのね。カーテンが閉まった後に着替えたんだろうけど」

「あ！ そうそう、そのカーテンって何なの？」

「実はこのトリックのためには不可欠なのよ。これは教授が生きている事を前提としたものだから」

「どういう事？」

「最終的に教授は何食わぬ顔でみんなの前に現われるはずだった。という事は、教授は生きていた、自由に動けたわけ。って事は、この建物のトリックはそれだけじゃ意味を成さない」

「意味がわからん」

「考えてみて。普通の建物で同じ事をしてみてもできるでしょ？」

みんなが自分を発見してこっちに向かってくる。みんなが来る前に二階に降りて身を隠し、通り過ぎた後で本館に戻る。ね、できるでしょ？ けど何の面白みもないでしょ？

だから、カーテンを後から閉めることで移動可能時間を減らしたのよ。あなたたちが来るまで私は動きませんでしたよって。ちなみにはあれはリモコン操作よ。あの部屋には教授しかいなかった」

「ああ、なるほど。あ、でも何で悪戯のはずなのに本当に死んじやったの？」

「途中で殺されたのよ。このトリックには二人の協力者が必要な。一人は、後からカーテンが閉まってギリギリまで動きがなかった事を誰かに目撃させるために本館に客を引き止める役。もう一人は、別館三階のカーテンに近づかせない役。カーテンを覗かれたら、窓で繋がっていないのがバレちゃうからね。さて、その二人は誰だった？」

「結衣さんと柏田さん……」

「そう。結衣さんは良兄を引き止めたし、柏田さんは結衣さんと静江さんが危ないって言うてすぐに引き返させた。つまりこの二人が協力者で、このトリックを知っていた。これを利用して殺した犯人」

「共犯？」

「うん。実行犯は……。悪戯と同じように心臓に刺さなきゃいけないし、スタンガンで殺害した後、あの短時間でそこまで運ぶには結衣さんじゃちょっときついと思うわ。」

けど柏田さんも鍵を取りに行くっていう事で動いてたから、遅いとあやしまれるし時間ギリギリなのよね……。

だけど、武術をやったって言うし、鍵もあらかじめ玄関とかに隠して用意しておけば時間短縮になるから、柏田さんが実行犯かな、スタンガンで殺すまでが柏田さん、包丁で刺したのが結衣さん、って事も考えられるわね。血の処理とかが大変だし。

犯行時に履いていただろう手袋とかも隠して後で処分する事はできたと思うわ。自分の屋敷なんだから」

「静江さんも、って事はないの？」

「教授の性格からして一人でも多く驚かせたいだろうし、静江さん本当に具合悪そうだったし、飲んだ薬に睡眠導入剤も入っていたから、ないと思うわ。具合が悪くなかったら、睡眠薬とかで眠らせてたんじゃないかしら。病院の薬に入ってたから手間が省けたのね」

「なるほどね」

「ってというのが私の見解なんだけど……」そう言って猪狩をチラリと見る。

「その通りなんじゃない？ まあ、実行犯がどっちなのかっていうのは、難しい問題だね」

「なんで結衣さんと柏田さんは協力したわけ？ それに実の父親を殺すほどの動機って？」

「さあ？ けど、結衣さんは柏田さんの娘かもしれないよ」

「え！？」

「俺も、どうしてかなって思ってたけど考えたんだけど。静江さんは昔かなり気の強い女性だったらしい。けど結衣さんが生まれたあたりから性格が一変している。それが夫以外の子どもを生んでしまった罪悪感からだったとしたら？ まあ、考えすぎだと思ったんだけど、警察の報告書を見たら教授はB型でも、B B型だった」

「嘘！？」

「結衣さんはO型だ。静江さんはA型。B O型ならO型が生まれることもあるけど、B B型からは絶対でない。そして柏田さんはO型

だ。今、DNA鑑定をしている所だと思うよ。

どっちにしろ教授は知らなかっただろうけどね。

それにしても、育ての親を殺す動機つてのはわからないな。けど、柏田さんの方の動機ははっきりしてるよね」

「むしろわかんないわよ。だって、あんなに従順に働いてたのに」

「彼が仕えていたのは教授じゃなくて佐加田家だって事だよ」

「……ああ。遺産を食い荒らす二代目に嫌気がさしたって事ね」

「そういう事。とにかく、結衣さんが実行犯でも、柏田さんが実行犯でも二人が共犯なのは間違いないし。結衣さんが犯人なら柏田さんも犯人、柏田さんが犯人なら結衣さんも犯人。逆も裏も対偶も全部、真だよ。ああ、疲れたなあ。」そう言って缶ビールを飲み干した。

エピソード

「なあ、お前らってほんとに呪われてるんじゃない？」「推理大会の解答が終わり、単純な宅飲みのお場に成り下がった藤井家。急に藤井が言い出した。お前ら、というのは猪狩と奈美香の事らしい。」

「は？ 何言ってるんだ？」

「だってさ、この一年で三回も殺人事件に巻き込まれてるんだぜ？」
本日何本目の缶ビールを開けながら藤井が答える。

「そんな事言ったらお前もだろ。むしろほとんどお前の一言で始まったようなもんだろ」

「確かに」 怜奈が笑って同意する。

「けど今回は関係ないぞ。お前と矢式だけじゃん。新川は一回目、俺は二回目で終わったけど、お前らは続いているな」

「確かに」 怜奈がまたしても同意する。結局彼女はどちらの味方なのだろう。

「だったら呪われてるのは康平でしょ」と奈美香。

「なんでだよ」

「だって私が呪われてるなんて考えられないわ」 理屈になっていないが、酒のせいもあるのだろう。「それに次でわかるわよ」と

「次なんてあつてたまるか」

次があるのかないのか、呪われてるのは誰なのか、それは次があればわかるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6077l/>

裂く策士、咲く錯視

2010年10月8日14時44分発行